

OutRider

ツーリングマガジン・アウトライダー

1998 JUNE

6

定価630円

◆特集◆

北陸 旅の原点がここにある。

シーサイド・クルージング

大らかな房総の海岸線をゆく

'98 RIDING PANTS CATALOG

ライディング・パンツの機能とデザインを見る

FUN LAND

奥久慈

へなちょこ探険隊

瀬戸際の里山、海上の森へ

TOURING IMPRESSION

KAWASAKI ELIMINATOR 250V

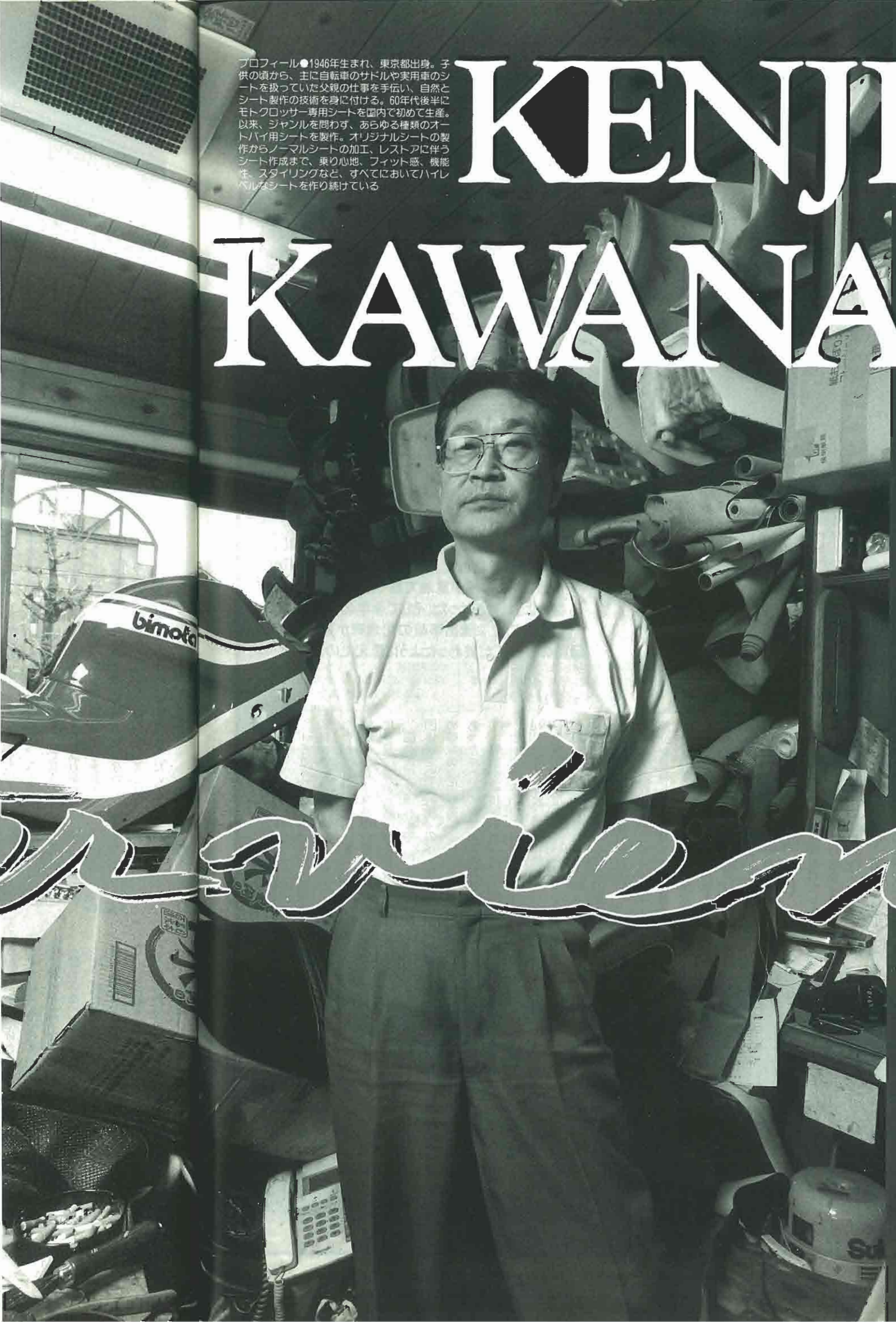


河名建次

河名シート製作所代表

KENJI KAWANA

プロフィール●1946年生まれ、東京都出身。子供の頃から、主に自転車のサドルや実用車のシートを扱っていた父親の仕事を手伝い、自然とシート製作の技術を身に付ける。60年代後半にモトクロッサー専用シートを国内で初めて生産。以来、ジャンルを問わず、あらゆる種類のオートバイ用シートを製作。オリジナルシートの製作からノーマルシートの加工、レストアに伴うシート作成まで、乗り心地、フィット感、機能性、スタイリングなど、すべてにおいてハイレベルなシートを作り続けている



シートのどこが自分に合わないか
それもわからない人が多いんです

最初に、シート屋さんという特殊な道に進んだきっかけを教えてください。

「もともとオヤジが、自転車のサドルのほうをやっていたんです。バイクが出てくる前、昔は全部自転車だったんです。荷物を運ぶのは、1960年代くらいから、自転車に代わってスーパーカブとかオートベットのとか、50ccが使われるようになったんであってね。当時のバイクに使われてたビニールレザーはものが悪くて、よく割れたんでね。ちょうどその頃からかなあ、まだ子供でしただけで見よう見まねで、シートの中の張り替えをするようになったのは、当時はみんな実用車で、みんなが遊びで張り替えるようになったのなんて、ごく最近だよな」
「実用車だから、当然後ろはキャリアとかいうか荷台なわけですよ。遊びに使うなら、ダブルシート風の方がいいから、そういう風に作り替えたりして。そのうち自分でも乗るようになって、一時モトクロスにハマった頃があ

シートを持つ性能を最大限引き出しながら、芸術的とも言える美しい仕上がりをも実現。素材からデザインまで徹底的なこだわりで、バイクのシートの製作、加工ならこの人、とライダーの間で名高いのが、河名建次である。はたして彼のバイク、そしてシートに対する思いとは、どれだけ深いのだろう。お店にお邪魔して、たっぷり話を聞いた……。

写真：増井貴光

文：野岸泰之

PHOTOGRAPHED BY TAKA MASUI WRITTEN BY YASUYUKI NOGISHI

そのマジシンの善し悪しを一番感じられるのがシートだと思っんです



ってね。まあモトクロスといっても、専用のマシンなんかないから、みんな実用車やスクランブラーみたいなやつを走らせてただけ。当然、シートもオフ専用じゃないわけ。だったら自分で作ってやろう、そのほうがいいものができる、って。実際その通りで、それを見た人たちが、いいなあ、俺にも作ってくれ、って言い出して、それがいつの間にか商売になっちゃった、って感じかな。とにかく自分の作ったもので、お金をもらった、っていうことの感動が大きかったですね」

「それが数年続いた後に、メーカーがモトクロス専用のマシンを出してきたから、仕事はなくなるかに見えるところ。ところがちょうどその頃、カフェレーサーブームというのが起きて、みんながシングルシートをつけるようになってね。こだわって、素材を探してあれこれやってるうちに、今度は第1次SRブームが来て……」
「いつも何かを探求しているうちに、次の流れが来てしまったわけですね。ところでバイクにとってシートというのは、どういうパーツだと思われませんか？」
「いや、結構大事なものです。ハンドル、ステップ、シートというのがマシンのポジションを決めるわけですが、その中でシートが一番重要だと思います。座ってみて、そのバイクの善し悪しを一番感じられるのが、シートじゃないでしょうか。そのわりには、シートに対して無頓着な人が多いですね。みんなすぐにハンドルから替えるけど、ハンドルっていうのは店を持ってても、そういうポジションになるかは、取り付けてみなければわからないものなんです。だから、合わないとか何本も買い替える人が出てくる。実はシートを最初に替えたほうが、無駄がないと思いますよ」
「そこで河名さんのシートの特徴を教えてくださいませんか？」
「うーん、外見からじゃわかんないんだよね(笑)。シー



トっていうのは、中のスポンジの素材で言えば、バイクメーカーが使っている車両用のものが一番いいわけ。その他に、いわゆるカスタムシートっていうのがあるでしょ、ショップが出しているやつ。あれって、ノーマルより良くなる、と思って、高いお金を出してみんな買うけど、全然よくないんですよ。というのは、自身のスポンジね。メーカーが使っているのは市販されてないから、手に入らないんです。だから、違うものを使ってる。ソファとかベッド用のものを使うしかない。うちではメーカーと同じいわゆる車両用のスポンジ、ポリウレタンフォームというんだけど、それを使っています。原料は液体で、これを仕入れて硬化剤などを混ぜて、様々な硬さのスポンジを作るんです。それを切り削ったり、張り合わせたりして、シートを形作るわけです。スポンジだけじゃなく、ビニールレザーも車両用のものがあるんですよ。これもソファなどの室内用は、屋外使用を考慮していないから、日光に当たると変色したりするんですよ。なるほど。ところで自分に合ったシートというのは、どうやって決めればいいんでしょうか？

「本人が違和感を感じたところを直せばいいんじゃないかな。まあ外観的には、座面が水平になっているのがいいんだよね。今の市販バイクについてはシートというのはほとんど前下がりでしょ。それだと、自分が居たいところに頑張ってるつもりでも、自然と前に行っちゃう。それをまた戻して乗ったりしてるから、くだびれちゃうんだね。メーカーは、このほうが見た目の形がいい、と思ってるのかも知れない。理想的なシートの形というのは、そのバイクを見ればだいたいわかるんですよ。シートのついている角度、高さ、幅なんかでね。乗り手の体格や体重が違っても、これはある程度変わらないものなんです。今のスポンジは昔と違って、重い人が乗ってもある程度以上は沈まないようになっています」

「でもね、どこが自分に合わないのか、それがわからない人が多いんです。そして大切なのは、合っていないな、と思っても、すぐいじらないことです。本当にここが合っていない、とわかってから触ることです。みんなちよっと跨ってみて、あ、これで最高です、とか言うんだけど、しばらく乗ってみないと本当のところはわからない。そして当然こちら側も、お客さんがどういうシートを望んでいるのかを、探り出す力がないといけないしね。何せお客さん本人がわかってないんだから。ここはこうした方がいいんじゃないの？」って聞くと、たいて

大きい人が「窮屈だ」っていうパターン。最近のバイクって、万人向けに作ってるから、ちっちゃい人も乗れるように作ってるんですよ。だから大きい人が苦しんでるんです。けれどノーマルのシート高が下がってるかという、それほどもないんですよ。メーカーは下げたいんだけども下げられなくて、その結果前に下がったデザインになっている、という」

「あと、最近ツーリング目的で、オフロードバイクの大きいのを買う人が増えてるけど、オフ車ってツーリングできないよ(笑)。何とかしてくれて、うちにもよく来るんだけど、オフ車はダートを走るためのバイクで、どっかり座ってツーリングも乗らさう、なんて思ったら大きな間違い。あれはケツが痛くて当然ですよ。オフ車ってというのは本来、座らないものなんです。よく、スポンジっていうのは柔らかいほうが尻が痛くならない、と思ってる人が多いんですが、そうじゃないんですよ。柔らかいと、最初は沈んでいい感じなんですけど、お尻をスポンジで囲われちゃうわけですよ。すると鬱血して痺れてくるんです。それが今度は痛みに変わる。それならば、沈まない、硬めのシートにお尻が乗ってるほうが、多少は痛んだけど、最終的にはいいんですよ」

「オフ車と言えば、最近では通勤用に使ってる人も多そうですね。そういう人は、シートが破れて、水が入ってボロボロになってから持ってくる。水が入ると、スポンジを乾かすのに時間がかかるんですよ。でも、待てないから濡れたまま張ってくれなんて、すごいこと言う人がいます。そういう人は、結局何でもいいんだよ」



50ccもBMWも結局同じ 要はいいに楽しむか、でしょう

「最近バイクに乗れなくなったんですけど？」
「うん、停まる度に足をつくの面倒になってね(笑)。まあ、最初に乗り出した頃は、50ccの加速でも、なんてすごいんだ、って、感動したけど、もともとバイクなんて大したものだとは思ってないから。街中で走ると危ないじゃない。それに、ヘルメットを被ると、ひたすらアキセルを開けたくなくなっちゃうから、余計に危ない(笑)。数年前に、BMWのK1000につけるシートを量産しようと思っ、テストのために2000kmぐらい乗ったのが最後かな。Rシリーズのも作ったことはあったんですよ。ところが、BMWジャパンにまるつきり同じものを出されて、こっちは小さいから、何も言えなくてね。」

オフ車をツーリングに使えば、ケツは痛くて当たり前 もともと座って乗るようなバイクじゃないんだから……



スポンジ成形発泡、一品物製作、レストアなどバイクのシート加工全般を専門とし、個人の様々なニーズに応じてくれる。来店での発注はもとより、郵送での発注も受けてくれるのも嬉しい(その際は身長、体重などの情報に加え、使い方や希望の形などの要望も必要)。シート張り替え/10000円〜、加工及び張り替え/15000円〜。営業時間/13時〜22時。無休。〒174-0074東京都板橋区東新町1-38-16(川越街道沿い) ☎03-3959-9648

「他人と競うのは嫌いだっただけです。とにかくスタートでトップにならないとダメで、あとは追いつかれないかな。だから、勝負してないんですよ。あ、そういえば、一度だけ勝負したな。そのコース、第一コーナーと平行する形でピットレーンがあったね。スタートして、やった、一番で第一コーナーに飛び込んだぞ、と思ったら、そのままピットに入っちゃったという(笑)。その時はドリンクケツから追い上げて、ゴールは2位でした」

「最初感じた頑固オヤジ風印象は、いつの間にかどこかへ消えていた。大して期待もせずにシートを持ってきた人が、仕上がり見た途端、ものすごく嬉しそうなる顔になる。この瞬間が、たまらなくいいんですよ。そう語る河名さんの顔つきは、少年のようにほころんでいた。こういう人を、本当の職人というだろう。自身はバイクを降りてしまっただけで、彼の作ったシートは、今日も日本中を走り回っているはずだ。」

「あ、最近増えしてきたのが、」

「そんなことがあったんですか。しかし、バイクが大事なことない、というのはいくらも意味なんですか？」

「50ccもBMWも、同じじゃないかな。って。値段はどうあれ、同じ事をするためのものですよ。初めて免許を取って、50ccに乗りながら、非常に感動して走ってる人と、大金払って、やっと足がつくつかつかないかのBMWに乗って、つまらなく乗ってる人と比べたら、50ccの方がいいじゃない。感動がある。高いもの、いいものを持つてる人のほうが偉い、みたいになってるでしょ。本当は、どう楽しんでいるか、が重要なのにね。モトクロスも、コースの中では規制がなかったし、お金のある人を負かす事もできたし(笑)」

「他人と競うのは嫌いだっただけです。とにかくスタートでトップにならないとダメで、あとは追いつかれないかな。だから、勝負してないんですよ。あ、そういえば、一度だけ勝負したな。そのコース、第一コーナーと平行する形でピットレーンがあったね。スタートして、やった、一番で第一コーナーに飛び込んだぞ、と思ったら、そのままピットに入っちゃったという(笑)。その時はドリンクケツから追い上げて、ゴールは2位でした」



最近マシン性能が良すぎて 乗り手に緊張感がないんです

「話は変わりますが、ノーマルのシートは、国産と外車で違いはあるんでしょうか？」

「あります。外車のほうが、明らかに研究してあります。国産車は、コストをいかに低く押さえるかの競争なんです。安く作って安く売って、早くダメになったほうが回転する、っていう、いわば使い捨ての発想でしょ。BMWに代表される外車は、多少コストがかかってもいいから、いいものを作りたい、という姿勢ですから」

「ちよっと強引ですが、ツーリングや長旅に向いているシートというのは、あるんでしょうか？」

「ハッキリ言って、ないんじゃないでしょうか」

「え、じゃあお尻が痛くなるのは、結局どうしようもないんですか……」

「うーん、本当じゃないですよ(笑)。もともと、バイクというのは緊張して乗るものだったんですよ。よし、乗るぞ、って。今は、エンジンもサスペンションも、性能が良すぎちゃって、乗り手に緊張感がない。全身の力を抜いて、ケツで乗ってるから痛くなるんです。本当は、痛いのが当たり前なんです(笑)。あんなのに跨って乗ってるのは、お尻だけじゃないですか。そりゃ、長い時間乗ってれば、痛くなるって」

「贅沢を言うな、って!!」

「難しいんですよ。絶対に痛くないのを作りますよって、言えないんだもん。もちろんトライはしていますが、100点満点は、ない。もしも僕がその人になれるなら、作れるんですけど。オーダーが一番多いのは、足が着かない、って人だね。あと、最近増えしてきたのが、

Come ride with us. **HONDA**

創50 おかげさまで創50周年

五感を揺さぶる、量感がある。

4発が、聞こえる。

Four

主要諸元 ●型式NC36 ●水冷4サイクルDOHC4バルブ4気筒・399cm³ ●最高出力53PS/10,000rpm ●最大トルク4.1kgm/7,500rpm ●乾重量192kg ■メーカー希望小売価格 ¥579,000 (北海道、沖縄および一部地域を除く)

※価格は消費税別、登録料と仕向税別です。※価格は標準装備品をベースとしたもので、実際にはオプション品や地域差により異なります。

バイクが好きだから、セーフテイライド。

PRO'S プロス店よりお届けします。

バイクフレンドシップ 見られるためのライトオン

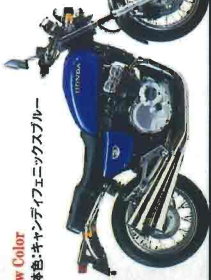
MCA 日本二輪車協会

OTO SAPIENS

カタログご希望の方は、カタログ請求券と切手160円(送料)を同封し、機種名と住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒160-8799 東京都渋谷区郵便局 原宿 本田技研工業(株)カタログ係まで。



New Color 車体色:イタリアアンレッド



New Color 車体色:キヤンディイエローニックスブルー



New Color 車体色:チタニウムメタリック

最大値引き 5.2% ホンダの最新バイク ラカラククレジスト 7/31(FRI)まで

詳しくは、このマークのある販売店へ。

※左の写真は、プロライダーによるテスト走行を撮影したものです。一般公道では制限速度を守り、無理な運転をしないようお願いします。